

國學院大學學術情報リポジトリ

公開講演日本の伝統と地域文化：
大学は地域社会とどう関わるべきか(平成二十二年度
國學院大學人間開発学会第二回大会公開講演会・シ
ンポジウム日本の伝統文化教育の可能性--人間開発学
の基盤構築に向けて)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 治男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001197

〔公開講演〕

日本の伝統と地域文化

——大学は地域社会とどう関わるべきか——

皇學館大学社会福祉学部教授・同学部長
國學院大學伝統文化リサーチセンター客員教授

櫻井 治男

一 大学と地域社会との関わりの動向

皆さん、こんにちは。ただいま過分の紹介をいただきました
櫻井と申します。

普段、私は学生が非常に少ない中で講義をしておりまして、
本日のようにたくさんの方々の前でお話する機会はないので
す。大学や学部運営の仕事が多くて、学生さんと向き合うとい
うと、処分の申し渡し、或いは何か小言を言うときぐらいです
が、今日は、私が勤務している学部の学生さんや、教職員の皆
さんと一緒に関わってきたことを紹介させていただいて、会場
の皆さんと一緒に考えることができばと思つて、登場しまし
た。

学生の皆さんが多いんですが、皆さんの中で三重県の伊勢市
においてになった方はどれぐらいいらっしゃいます？ちよつと
手を上げていただけませんか？



パラバラですね。それでは、「赤福」というお餅のことを知ってるぞ、という方はいらっしやいますか。かなりありますね。手を上げられた方の分ぐらいであればお土産に持つてこれたかもしれませんけれども、三重県の伊勢市というところに私は住んでおります。

御承知のように、伊勢市は伊勢の神宮という、日本を代表するお社が鎮座している、そういうところでございますが、私が今勤めておりますのは、伊勢市と、そのずっと西方の大阪市とのちょうど中間にあたる「名張市」に、新しく設けられたキャンパス、新たに設置された学部で、開学以来教鞭をとつてきました。

今日の話題は、「日本の伝統と地域文化」ということで、サブタイトルが「大学は地域社会とどう関わるべきか」、です。お手元の資料に基づき、パワーポイントでも関係の材料をお示ししながら、およそ五十五分ほどの間で話を致しますが、途中かいつまんで申し上げることもあるかと思ひます。

最初に、皆さん方が学んでいらっしやる「大学」そのものが、「地域」との関わりを云々される、ということについて。國學院大學さんも、そして、私の勤めております皇學館大學も、現在「私立大学連盟」という組織の会員です。そこが出しております雑誌（『大学時報』）で、何回か大学と地域との関わりに関する特集をしております。

それを、ここ数年分にわたり見ましたところ、四つほどのテーマ（①地域貢献への喚起、②大学所在地における「地域学」「地元学」の構築、③地域社会と大学との共生、④大学間連携による地域貢献）が特集として挙げられているんです。

まず、「大学」というものは、今後ますます地域貢献、或いは

社会貢献を果たす必要があるんだ、そういうことが言われているのです。

いやいや、ちょっと待ってくださいよ。「大学」というところは、学生さんを卒業させて、社会或いは国家有用の人材として輩出しており、そのこと自体で役割を果たしているのじゃないですか。そのように考えられてきたところが、もつと社会や地域に貢献するということが強調されているわけですね。

そして、お手元の資料の最初に書きましたように、その中には、これまで大学が象牙の塔として閉じこもり過ぎてきた。学術のみならず、学生さんもキャンパスに滞留するのではなく、地元にもつと関わりを持つて行く必要があるんだという、そういう大きな変化が出てきておるわけです。これは後で申し上げますけれども、伝統的な学校や新しく創立されて行く大学・学部で多少違いはあると思いますが、そうしたことが積極的に言われ出しました。

そして次、その場合に何をもつて地域と関わるかとなると、最近よく耳にするのが「地域学」という、学術的ニュアンスを持つ事柄です。いや、地域といつては幅が広いので、「地元」という表現が合うんじゃないかということから、地元学として取り組みも行われています。

お手元の資料の後ろに、『大学時報』の特集記事の一覧を挙げておきました。例えば、國學院大學さんでは「渋谷学」という取り組みをされ、公開講座をはじめ種々の方向性をお示しになるとともに、「地域」を巻き込んだ多様な、活動を今されてるんですね。

本日、寄せていただいた、「たまプラーザ」ですか、こちら

の方では「たまちゃん学」みたいなものが生まれるのかもしれないけども、そういう地元に着した大学を目指すということですね。

さらに、大学が色々と地域に貢献するという意味は、地域と互いに共生して行くか、という発想がもつと大事なことだろう。大学だけが学生で潤って、地元が廃れてしまつては問題だ、共に時代を生き延びる必要性ということも言われております。

それとともに、一つの大学だけじゃなくて、大学同士が連携し合つて地域へ貢献して行く、そういう方向性での取り組みが、ますますなされてきております。

例えば京都へ行きますと、京都駅の北側に「大学コンソーシアム京都」が運営するキャンパス・プラザ京都という建物があつて、多くの大学が単位互換しており、一つの建物の中で他大学運営の授業をとれるようになっていて、非常に便利なものがございます。コンソーシアムでは、市民対象の生涯教育や産学連携事業など色々と進められています、今までの地域との関係をあためて捉え直そうという大きなうねりの中のことだろうと思うんです。

二 大学として誰が・いつ・誰と、どこで・何をもつて・どのように地域と関わるか

ところが、例えば学生の皆さん方が、先生から、「はい、もつと『地域』と関わっておいで」とか「何をしているの、もつと『地域』に出なさい」と言われた。

すると、「いったい『地域』って何ですか」。そういう戸惑い

というのがあると思うんです。「『地域』に関わられて言われるけれど、私関わってますよ。いつも町のコンビニで働いてます」、或いは「いや、ちゃんと近くの店で物を買ってますよ」、と。そういう意味での関わりなのかどうか。そういうことを含めますと、「地域」への関わり方というものを、いくつかの考えから問いかける必要があるかと思うんです。

例えば「誰が」という場合、いくつか例を申し上げたいと思いますが、私が今所属しております社会福祉学部では、まず「学部」として、それから二つ目は「ゼミ」単位で。これは正規の科目の中に取り組んだ地域への関わり方。もう一つは、「学部」の先生方の専門性をうまく連携させるとなれば難しいところですから、「研究所」を核として地域へ関わる活動を行い、研究成果なども、そこを通して地域へ還元する、そういう形での関わり方ということで、学部・ゼミ・研究所の三つを中心として動かしてまいりました。

それから、「いつ」という場合、これも色々ございます。資料にも掲げておきましたけれど、講義の一環として、とか、或いは個人のボランティア活動として、さらには大学行事そのものとして、地域と関わる。反対に地域で色々な行事等をなさつていらつしやる、そういうところへ関わるということです。たぶん地域主催の行事ということになれば、「あつ、私、この間、あそこから頼まれて行った。今度、友人に誘われて行くんだ」という、そういう関わり方もありましょうが、学部や、或いは大学組織としてどう関わって行くかということも大きな課題になつてこようかと思うのです。

そして三つ目は、「誰と、どこで」というところです。これ

までは、大学が何か地域に関わると思いますと、先生方が、自治体等の代表者と関係を持たれたり、或いは有識者として行政の委員を務めるということがあるわけです。地域の人々の誰と、というところでは、何らかの組織というかたちであるのか、或いは一人一人の地域の方々ということなのか、色んな状況というのがあります。

それから、学内の「キャンパス内」で関わる、これは「空間的」にですね。または「キャンパスを含めた地域」の中というふうに捉えるのか、キャンパスのある地域でなくて、もつとほかへ。例えば、「キャンパスの遠隔地域」としましたのは、どういうことかと申しますと、伊勢市の東隣りに鳥羽市というところがあります。港町ですが、そこから船で四十分ぐらい行きますと、「神島」という、伊勢湾の入り口に島がございます。ここは三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台になったところなんです。民俗調査がよく行われていて、外部といいますか、県外の大学から先生方が学生の皆さんを連れて、調査に来られました。そういう形も一つの関わり方なんです。

國學院大學におられた柳田國男先生が、「神島」というのは、老人にとつていわば理想的な島、「老人が敬われる島」と評されて、次々と調査に入る方もそうした面を見ていかれる。これはそうなんです、外部の方により「敬老の島」神話といえるようなものが出来上がってくる地域性を持っております。それじゃ調査後も、ずっと関係が続くかというと、必ずしもそうではないんですね。途中で途切れる。島の方々から見ると、時折「異邦人」が来る。そういう感じになりかねない。その関わり方っていう点では色々あるんですが、「遠隔地」という点

では、「調査研究」、すなわち地域の情報を得て、お返しできていないといえますか、必ずしも互酬性の関係でないことが多いのかな、というふうに思います。

次は、じゃあ、「何をもって」関わるかというこの四番目のところです。ここが本日の話題の中心になるのかと思います。一つは、オーソドックスな言い方をしますと、大学の持つている「学術資産」、或いは「教育資源」というものをもってして関わるんだ。そこには、当然どういうものを「資源」「資産」とするかがありますね。私立大学であれば、それぞれの大学の特色というものの、特性が現われた中であることであろうと思います。そうしたものは築きあげられてきた資産であったり、学校が展開される中で生み出される新しい資産といえるわけですが、國學院大學や、そして私の勤めております皇學館大学というのは、そのベースに「神道」というものがございます。

ということは、一つには「日本の歴史」、或いは「伝統」というもの、そういうものを基盤とした教育というものがあり、そこで学生の皆さんが育成されて行く。そうした学生さんともにも、もう一つは、これまで蓄積されてきたさまざまな学術（専門研究）的な資産、こうしたものが、地域へ関わっていくときに、大きな特色や特性として発揮される、そういう関係性であろうと思うんですね。

私は自分の研究領域と関係するんですが、神道の中でも、神道のものの考え方とか、或いは中央の歴史との関わりということでは、なかなか専門領域のところでそれを表すことはできませんが、一番興味深いといえましょうか、ごく関わりやすいところというのが、地域にそれぞれ在るお社、「神社」じゃない

かな、と思っっているんです。これは、なぜかということは後ほど申し上げますが、地域の神社を基本に据えながら、そして、関係づけを持って行くという、こういうことが一つの特色として、ほかにない大学の特徴としてあろうかと思うのです。

もちろん仏教系の学校であれば、地域の寺院ということもありましょうし、それ以外の宗教系の学校では、それぞれのことがあるんですが、どちらかといえば、日本の宗教関係の中でいえば、寺院や神社というものは、非常に地域に密着した歴史というものを持っていて、そういう中から、お参りに行くというだけじゃなくて、何を展開するかという、そういう発想が大事になって行くんだろと思うんです。

地域の神社を基本に据えながらも、いったい、それじゃあ、地域の方々に大学が持っているものだけじゃなくて、逆に地域自体にある「資源」や、或いは「資産」というもの、これをもつてしてどう関わって行くか、ということも重要な点であろうと思います。そういう中に登場するのが「地域の文化」という領域かと認識しています。

「地域の文化」は、多様であるといえは多様ですし、後のシンポジウムで具体的に色々お話をいただくところがあるろうかと思いますが、これをどう捉えるかというのは、概念規定といいましようか、定義づけをすると難しいかもしれませんが、私は、日本文化と言えば、「日本を特色付けけるもの」、「海外の文化と比較したときに、はっきりと現れてくる、意識されて行くようなもの」として、これを「大きな伝統」という表現を使い、そして、この国の中でそれぞれのローカル性を持つて在る文化

を「小さな伝統」というふうに捉えてみたらどうだろうかと思っています。

大伝統・小伝統と言えば、人類学者のロバート・レッドフィールドという人が、これらの概念を示しているんですけれども、大事なことは、私どもが「地域社会に関わる」と言ったときに、「小さな伝統」だけじゃなくて、「大きな伝統」と「小さな伝統」が往き来し合う、そこに重要性を見出しながらという必要はないだろうか。

突拍子かもしれませんが、國學院大学の民俗学の高名な先生でいらつしやった折口信夫先生は、「神楽」という問題を取り上げられますときにも、「宮廷の御神楽」、それだけじゃなくて、地域にある「里神楽」、その両者の関連性に目を向けつつ、源流や本質性を探っていかれたように記憶していますが、こうした視点がありますよね。

単にどちらかじゃなくて、その行き交うところに一つの問題系を意識する。こういう視点があるんじゃないかと申し上げて、ここでは「地域の文化」とも表現しておりますが、それを私自身がどのように捉えているかということで、資料には「一定の空間を共有する人々が『生活』の中でつくり上げてきたもの」と記しました。

生活は、歴史的、時間的な積み重ねでしょうし、今もつくり上げられているもの、或いは「これからさらに」つくり出されていく、こういう状況での「文化」。「文化」を、さらに単純化して言えば「生活の様式」ということなんです、当然そこには、色々な生活上の習慣もありましようし、或いは行動の様式や、人と人との関係の仕方、そういうものも含めて文化という

ものが地域ごとにあるわけです。それを私どもが地域の方々にとつての「ニーズ」として、また「状況」として知るということ、その知る営みにおいて関わる、ということもあるわけですね。

そして最後の「どのように」地域と関わるか、ということは、ここでの関係としても一度申し上げますと、私どもは、大学が蓄積してきたものと、もう一つは地域が生み出しているもの、これらがピタッと合わさって行く、或いはその関連づけ、連携・共同・協働（一方向から双方向・マルチ方向）の中で大学の関わり方、というものの一つの特性が発揮されて行くんじゃないかと、こういうふうにいるところなんです。

三 大学・学部・歴史、立地環境の要素

もちろんそのためには、「大学や学部の歴史」、或いは「立地環境の要素」というもの関わってきます。例えば伝統校、或いは伝統的な学部と言われるものと、新設校や新設の学部というものがございます。國學院大學は平成二十四年に創立百三十周年を迎えられますね。ちょうど、私どもの大学も同じときに百三十周年を迎えます。ただ、皇學館大学は、昭和二十年から三十七年まで十七年間、当時のGHQの政策によつて廃校になっておりましたので、途中で空白期間があるのですが、こちらの学校はずっとつながっております。それでも、これまでの伝統と、歴史の中で生み出されて来た学問体系、そして、大学の「建学の精神」を踏まえた展開というかたちで、國學院大學では人間開発学部を設置されまして、二年目を迎えられる。この点で見れば、非常に新しさを持っているとともに、一方では

その背景に長い歴史があるという、こういう関係がございますね。そういうものを踏まえるということが一つ。

それから、二番目は「立地地域の異なる環境」大都市圏の大学／大都市周縁の大学／地方都市の大学」ということも重要な要素だと思います。私が今おりますのは、地方の都市、人口八万余りの都市にある学部で、通勤時に途中よく電車が止まるんです。多くの場合は、鹿と出会います。冬場の数カ月はそれを覚悟して通わなければいけない学校なんです。というのは、三重県のとやまの方へ行きますと、おばあちゃんかな、と思つたら実はお猿さんが座っていたとか、本当にこれは現実の世界なんです。ローカル列車に乗っているのは一人とか、下手すれば動物が乗つてくるような笑えない世界があるのです。都会のこちららもう人ばかりですよ。

そういう違いはあるんですけども、それぞれの立地環境というのは活動の仕方にも関係するだろう。それから、また学生さんがどういうかたちでキャンパスの生活をしていらつしやるのか。例えば大学の近くに下宿をしているとか、或いは通学をしているということによつても、関わり方に異なりというものが生じてきます。

四 皇學館大学社会福祉学部の概要

それでは、今度は少し具体的に、決して宣伝ではございませんで、私どもが関わってきましたことを、紹介をさせていたいただきたいと思ひます。



皇學館大学社会福祉学部は、平成十年の四月に開設をされた、大学にとってはそれまでの単学部を脱皮した時の初めての学部です。ただ、平成二十三年三月、すなわち今年度で名張学舎を閉じます。そして、二年間だけ学生を伊勢学舎で教育をした後、この学部は無くなる予定です。もちろん福祉教育の内容を継承して新たな学部が今年の四月から現代日本社会学部としてスタートしております。名張市で展開してきたことは、もう本年度で終焉を迎えるところなんです、初期からのことをこの機会に振り返ってみようと思ったんです。

と申しますのは、学部や大学の設置の仕方というのは色々あるんですが、私どもの学部は、その設立時に、三重県と名張市から、四十億円強の資金・土地を提供していただいて、特に名張市が多くを出され誘致を受けて出来あがった学部です。「公私協力方式」(名張市・三重県・皇學館大学の三者)と呼ばれるたて方なのですが、開設から「地域貢献」ということを色んなかたちですべきだということが言われておりました。

ただ、学部が出来あがるとき、住民の中から反対運動も起こされました。住宅地域に学生が来るとうるさくなるとか、大学なんかを誘致する前にもっと環境整備をすべきだなどと。市としても、いわゆるインフラ整備の途次でございました。ただ、当時の市の執行部の方が、これからは少子高齢化社会を迎えて行く、「福祉」というものが非常に重要な領域だ、ということでも、しかもそれが伊賀地域における初めての大学であり、三重県内の中でも「福祉」という学部を持つ大学はございませんでしたので、「ぜひそうした学部というものの設立を」というのが望まれたわけです。

それに当たって、じゃあ、社会福祉学部を皇學館が作ろうと
いったときに、いったいそれはどういう「社会福祉」なのかと
いうこと、学部設置の目的は明示されておりますが、具体的
な教育内容という点では途次の状況でした。学部設置は文科省、
社会福祉関係の資格は厚労省の認可が必要ななかで、福祉の世
界に関わってゆく人材養成に、神道福祉学というような体系
立った学問を踏まえた教育展開を図ることはなかなか難しいと
ころですが、「なぜ神道の学校が社会福祉に関わるの」という
のは常に問われてきたところです。学部設置時の厚労省とのや
り取りで、福祉といえば暗いイメージがあるが、そうではなく
神道の明るさで、そのイメージを変えて人材養成をしてほしい
と言われた、と聞いたことがあります。私は「神道だからこ
そ」という想いで関わってまいりました。

反対運動があると申しましたよね。キャンパス生活を始める
についても、町へ出かけて飲みに行く時、どのお店の方が賛成
の立場なのか、あるいは反対の立場なのか分からないんです。
ですから、店の方とは当たり障りのない会話をしつつ飲むよう
な雰囲気でした。今となつては、もう皆さんが寂しがって下さつ
て「残念やな」と言われる。

その「残念やな」っておっしゃる一番のもととは何かと言うと、
学生さんたちの力、存在があつたんです。だからこそ、私たち
教員も過ごすことができている、というような、そういうとこ
ろがございました。このことは余談ですが、当初、非常に緊張
した中で勤めたことは確かです。

資料に「課題」と書いておりますが、これは「神道福祉の創
出と研究・実践」(新学部における「建学の精神」の継承)、こ

のことをどうするかという問題だったんですね。なぜかとい
ますと、「社会福祉」の領域というのは、日本の近代の歴史の
中では、キリスト教が積極的に関わっていらつしやる領域で
あったり、仏教の福祉という観点からは、古代からの長い「社
会事業の歴史」というものがございます。「神道の福祉は何？」つ
てこう言われても、具体的にお示しするのは、本当に難しいと
ころだったんです。

歴史的に古くから「神道の福祉」というものがあつたのかと
いうことになる、これは歴史をさかのぼりながら明らかにし
て行くべき、学問的な課題を持ちますが、一方で現実の中では、
資料の最後のところに「参考」としましたことがあります。

「現行の神社本庁傘下の神社規則」を掲げましたが、これは
現在の多くの神社、約八万あると言われておりますが、神社本
庁に属しつつ、こうした神社規則を立てて神社が「宗教法人」
として認められているわけです。

その第三条を見ていただきますと「本神社は○○○」とあり
ますね。○○に何が入るか。御祭神、神様のお名前なんです。
学生の皆さんどうですか、もし神社へ行かれましたら、「あ、
八幡さんだ。ここはなんていう神さんなんだろう」。すぐ言え
ます? ぜひ、ほかの学校ではないように、言えるようにがん
ばってみてくださいね。

祭神を「奉斎」し、「公衆礼拝の施設を備え」。ここね、「公
衆礼拝」とあるでしょう。「公衆」ということは、「広く開放さ
れている」ということが大事なんです。「家の中にお社がある、
そこで祀ってお参りしている、お社の形はお寺の形ではない、
神社の姿をとり、鳥居もあつたり」という形だけでも、それは「公

衆に開放されていない」という点では、宗教法人としての施設ではないんです。プライベートなものになると思います。

そうした「公衆の礼拝の施設」を備えて、その次、「神社神道」ですから、これは神道というものを、特に日本の歴史・伝統を踏まえる神道の在り方というのを「神社神道」と言ってますよね。それに従って「祭祀」を行う、祭りが行われる。そして、御祭神の「神徳をひろめ」、さらに、「教化育成」をし、「社会の福祉に寄与」と書かれています。

だから、神社の役割というものは、こうした「社会の福祉に寄与」する存在であると、その目的に示されているということ是非常重要的だ。こういう形で、私は神道を「福祉」という領域で展開する根拠というものが、これは戦後の宗教法人法で新しいのですが、しかし、全国のお社はこういう存在であるんだ、ということは、神道と福祉の関係を説く上でも大きな意味を持っているように思います。ただ、実際にどのように、そのことを学生の皆さんと共有していけるかというところなんですね。

そして、建学の精神の底流としてある神道、私どもの大学のそうした在り方というものが、初めて学部、大学を持つ地域で、どのように展開できるかということなのです。ただ、そういうことを、はなから打ち出すのではなくて、まず一人一人の構成員（大半の教職員にとり初めての赴任地）が、いかに学部所在地の地域に溶け込むか、どのように地域と交流するか。「まず地域の方々と本当に具体的に接し、接近していこうよ」という、そういうことを教員の方々と話し合いました。

その後、学部における学生数確保の問題とかが起こって、キャ

ンパス閉鎖、学部改組という形で数年後には終焉を迎えますが、これまでは、地域に目を向けながら、そこへ溶け込もうという気持ちを持って来ましたので、伊勢でも機会があれば展開を図ればと考えているところです。

先ほど言い忘れましたけど、神道の福祉ということに関連しては、神社界の実際の活動の一端として福祉施設の設置という点で見ますと保育所、子どもにかかわる幼稚園が比較的多いんです。仏教系やキリスト教系に比べれば、数としては少ないですが、「鎮守の森」を活用するというんでしょうか、そこを提供して保育や幼児教育に関わっている例が見られます。これは「子ども」の領域が対象となっていますね。

もう一つは、神社のお祭りなんか実際に見ますと、年配の方々が大事にされてるんですね。「お年寄りには神様」みたいな感じで。そして、子どもは、日本の伝統的な言い方ですれば、「七つまでは子どもは神の子」だとされる。人生の最初と、そして、最終という失礼ですが、新たな世界に行かれる方々とがリンクしている、こういう循環的な関係性というのは「日本文化」の中にある特徴と言えるでしょうね。

神社というものは、そういう点では、施設という面だけじゃなくて神社の持っているソフトな面、そういうものを見渡しますと、さまざまな繋がりや「萃点」であると感じられるところなんです。そういう部分は、今、福祉課題として言われる、高齢者の孤独や子どもさんへの虐待などの問題に対して、地域として、また精神面で解決へと導く環境領域というのを持っているように思いますね。

五 大学の地域社会への貢献（設立時に求められたこと）

さて、大学が地域社会への貢献として求められたところは、「施設（図書館、グラウンドなど）の開放」、これも当たり前ということでした（その他、公開講座の開講、研修会などへの講師派遣、地域の祭行事・福祉施設・小学校などへの学生のボランティア派遣）。だから、図書館は、貸し出しカードを発行しておりますし、普段、市民の方々がここで勉強していらっしやいます。

それから、教員が自治体や病院などの委員を積極的に引き受けて来ました。時期的には名張市が「地域福祉計画」を策定する頃にありまして、それに関わることがございました。

私は、福祉の専門ではないのですが、福祉計画策定の委員会で委員長を務め、学部の専門の先生お二人と関わりました。意見の取りまとめ役ということでしたが、計画を立てるときには、「学生さんたちをぜひ巻き込みたい」と希望しまして、委員のお一人であった筒井琢磨先生は、市内三十地区余へ、一つの地区ごとに三回のワークショップを行う機会に参画されました。

私も何回か一緒にしましたが、授業が終わり、夜七時ごろから十時前まで、先生方と学生さん、そして、地域の方々とでワークショップをやって、地域のさまざまな課題と解決法を出しあい、また地域にとってこれから何が必要かということをお互いに話し合う。そういうことを踏まえて福祉計画をまとめていったところでした。このことは、名張市内の各地域を知り、また人々を知る、そして関係作りが出来るという、とても良い機会となりました。

それ以外には、自治体の「研究委託」を受けて、意識調査やニーズ調査をいたしました（量的調査と分析が中心）。これは社会調査、社会統計の先生がいっしょにしましたので、その先生方が中心となり研究をまとめていただくことが出来ました。

とにかく、必死で学部や学部メンバーに期待されることを果たそうとしてきたわけですが、成功、不成功は別にして、一つの筋を保とうとしたことは、学生さんを巻き込んだ地域への取り組みという意識でした。

六 学生教育への取り組み（建学の精神・伝統文化・地域文化）

さて、話しの出発に戻りまして、学生さんに対して「建学の精神」や「伝統文化」、「地域文化」というものを、どのように私たちは授業等の中で伝えられるのか、講義だけでは、不十分ではないかということが、当初から感じていた課題であつたんです。

御承知のように、大学の学部がスタートしますと、四年間はカリキュラムの変更は認められません。皆さん方は、二年目ですから、三年目、四年目を迎えられて完成した段階で、これまでの皆さん方の成果を、色んな形で展開できる。そういうところがあろうかと思うんですが。

私どもは、どういう状況であつたかといいますと、平成十年でしたから、従来の「教養科目」といわれるものが一・二年次に配当されていて、それから、三年、四年に社会福祉の「専門科目」が増えてくるという、「くさび形のカリキュラム構成」を採っていたんですね。これは学部の性格や教育の目標を具体

化する考えです。一・二年生のときに神道や日本の文化の勉強（講義科目における日本文化・神道）Ⅱ①「日本文化と神道」〔一年次春学期・必修・二単位〕、②「神道と福祉」〔一年次秋学期・必修・二単位〕、③「民俗学」〔地域文化論〕〔三年次以降・選択〕をして、学年進捗とともに、こうした分野とは関係性がなくなり、単位消化の科目となりかねないわけです。「連続性」というのが生み出せない、という状況がございました。

実態としてどうであったか、というので、「日本文化と神道」という科目で、資料を見ていただきますと、これは実は恥ずかしいんですが、私が担当したときの授業評価の資料です。当時は、学生の皆さん方に「授業アンケート」という表現で協力してもらっていたものですね。平成十年当時は、まだ記述方式でしたが、最近は、ネット上で、携帯電話からアンケートできるように変えたんですけれども、多数の質問項目の中から一部を取り出しました。

例えば、「この講義を聴いて何か役に立ちましたか」、そういう聞き方、「これはあなたの将来にプラスになりますか」というような質問項目も含まれております。そのデータを自分でも一度整理したものをお示しましたが、講義への拒否というものは殆どないのですが、強い関心を持ってもらうほどには至っていない。講義担当者、すなわち私の教え方や教える内容に改善の必要があるということでもあるのですが、「講義は聴いた」というだけで、それを、教養として意義を見出す、あるいは自分の専門領域に活かそう、というのとはなかなか見えてきませんでした。何年か続いているなかで、これは課題だな、というふうに思いました。

ましてや一年生の皆さんですので、「神道」という科目、それ自体「何？」ということですね。もちろん、私どもの法人にも、皇學館高等学校がございしますので、そこから入ってこられる学生さんたちは「神道」というものはこういうもの、ということでは学んでこられますが、他の高校から、福祉系の学部に進んでこられるのに関係があるなど思うのは、その「背景」なんですね。仏教系やキリスト教系の高等学校からの進学が結構あったんです。そうした学校からの方々には、学校行事や宗教の歴史を学ぶと宗教が関わっていることを、改めて自覚する場合もあります。しかしながら、殆どの学生さんにとっては「神道」というのは初めてであることと、ましてや、「福祉の専門を勉強しに来てるんだから、なんでこんな日本の文化のことを学ばんといかんの」という疑問というのはございました。

それに関連して、「民俗学」や「地域文化論」という科目も、これは選択の科目として設定しておりました。ところが、資料で「課題」〔日本文化・神道を学ぶ意義の理解〕〔建学の精神と自校への帰属意識〕〔学部の専門性へ進むほどに日本文化・神道とは縁遠くなる状況〕と書きましたようなことが、課題になってきておりました。私ども教員の中でも、こうした問題をどのように扱おうか、という話になったのです。

学校行事としては、入学式や卒業式は伊勢市のキャンパスで行い、全入学生、全卒業生は神宮に参拝することになっています。或いは十月の「神嘗祭」。これは、神宮の秋祭りなんです。秋の収穫のお祭りのときに、大学の創設された地である林崎文庫を訪れ、原則として全員参拝する、ということになっていま

す。名張からは、バスを仕立てて、道中、神宮の祭りや建築、伝統的な技の結晶である神宝・装束調製のビデオを見せながらまいりました。ただ、「年に一度、神宮と関わる」というだけでは、なかなか伝えにくいところでもあります。「おかげ横丁」へも行くから参加するように、として学生を呼び止めるみたいなどころもなきにしもあらずです。今は神宮参拝が終わったあと、「おかげ横丁」で学生と食べた昼食代は、学生指導費の方から出しております。だから、私などは「お伊勢参りをたのしんでおいで」と言ってるんですよ。学校行事だけでなく、別な機会に訪れて神宮に親しんでほしいからです。そういう形ですが、ごく自然に、直接こういう大きなお社、あるいは神社へ赴くというのは大きな意味を持っていると考えております。

他は、キャンパス内で祭典を行うときに、これは伊勢学舎では、大学祭のときも必ず祭典を行います。それを名張でもするんだというところで行っております（キャンパス鎮守社・神明宮の例祭、大学祭における祭典）。第一回の大学祭開催の時に、実行委員の学生さんたちへ、本学の特色をお話しし、祭典を実施しました。たまたま神職資格を有していた学生さんが居ましたので、彼に奉仕をお願いし、職員の方々と祭典準備にあたることで、初めての教職員にも神道の儀式を学ぶ機会になったのではないかと思います。後には、学生さんの方から「大学祭のとき、祭典準備どうしましょう」と言ってくれるようになります。また、平成二十三年二月、名張学舎での最後の学生主催のイベントにあたり、実行委員会のメンバーが、神明宮にお参りしたので、遷座祭はその後にしてほしいと申し出てくれています。

七 学生が地域・地域の人々とふれる機会の創出

そうした中で、私どもはもともと地域と関わる機会が必要じゃないか、ということと、一年次のときに、キャンパスセミナーというものを充実しようということになりました。開学時から数年前までは、一学年の学生定員は二百名で、三年次からは編入生を入れて二百四十名でした。開学時の新入生は、実際には、定員を少し上回る二百五十名程でしたが、四年間は新たなカリキュラムは動かせませんでした。その後、幾つかの資格課程の設定と連動したカリキュラム改定をしていましたので、キャンパスセミナーが実際にスタートしたのは平成十八年度からです。

水曜日の二限目、すなわち、お昼前の九十分を利用して、指導教員一人が、十名ぐらいの学生ですけれども担当いたします。毎週一定のプログラムに沿って教員と学生が出会う、ということをやりました。学生さんは四年間、同じ指導教員が付きまします。全教員が担当するということで、学部長も指導教員を持ちますので、先生方に更なる負担をお願いしたんですけれども。内容的には、この大学で学んで行くための「ソフトウェア」を考えつつ、「なぜ、あなたは、この大学で、そして、社会福祉学部で学んでいるんですか」ということを、地域との関わりも交えて、共に学んでいただくわけです。

現在の福祉の領域において、「地域福祉」という概念は非常に重視されております。これはどういうことかと申しますと、これまで福祉といえますと、障害者、高齢者、児童福祉というように分野別に措置、処遇されていたのですが、社会福祉の構

造改革以降、普段暮らしている地域で、人々が本当に自己実現の生活を目指すということですから、ソーシャルワーカーとしても「地域」というものを「よく知る」能力が求められるだろう。じゃあ、地域を知るために、どのように知ったらいいでしょう、或いは地域へどう関わっていったらいいのだろうか、ということを通して学生のと時から主体的に考え、そして関われるようにということから「地域」ということを強く意識しました。

そのための具体的な場というのは、まさに名張市というキャンパス立地の地がございまして、名張市の自然、歴史、生活(民俗)を描いた『おくつもの名張 今昔』(名張市史編纂室)という図書を学部で購入して学生の皆さん、先生方へお渡ししました。この書籍には学部の者も執筆陣に加わっております。そして、情報系の先生だろうが、英語の先生であろうが、専門性を離れて、学生と一緒にこのテキストを読んでもらう、次は実際に町へ出ていただくわけですね。町のランドマークとなる所、福祉関係の施設、車椅子にのりバリア箇所のチェック、そしてウォーク・ラリーでは神社も含めました。私などは、キャンパス周辺のムラの墓地へ行き、両墓性のことを話して日本人と慰霊の問題に及んだり、牛魂碑の前ではペット供養との異なりなどを語りました。臨場感がありますよね。併せて墓地の出入りにはお辞儀をして、人様のお墓へ入るには失礼があつてはならないと教えたりしました。町中訪問ではレストランでお昼もとってきてくださいということ、昼食にかかる時間設定をしたわけで、うまく使えば二時間強使っていたけるわけです。その効果がどのように現れるかはFD委員会で検証することになります、学生同士が「どこへ行ったか」「どこが美味しいか」

ということを話題にし、まずは地域を知ろうとしてくれれば良いわけです。

それから、もう一つ、「地域文化探訪」(基礎教養系・選択科目)。これは健康スポーツの先生がいらっしやつて、「学生は身体を動かさんとあかんのや」ということで、外へ出てゆく機会を設けてくださっています。その場合も地域文化を知ることと結び付けられ、この先生、すごく活動的な先生で、名所旧跡、自然と関わる所を巡ったり、また「名張」は、奈良と伊勢を結ぶ参宮街道上にありましたので、実際に、三泊四日ぐらいで学生さんとずっと歩いて下さるんですね(内容・赤目四十八滝めぐり・大和三山散策・山の辺道散策、名張→伊勢の神宮(参宮街道ウォーク)。街道歩きは年に二度くらいだったでしょう。か。こうしたことを、他の講義の中でも取り組んでいたでいます(その他、「社会調査実習」(選択)などの実習科目との関係性を模索)。

このような形とともに、地域と関わるあり方として、学生さんによるボランティア活動の自主運営の環境を整えよう、ということになりました。級友へのノート・ティークをはじめボランティア募集など、これまで個別にクラブやサークル、あるいは、学務課が窓口となり行われていましたが、ハード的にも学生さんが自主的に活動するには不十分で、また対応窓口もあまり明確ではなかったのです。そこで、部屋を確保しまして「学生支援センター」のボランティアルームとし、学生さんが常時、自分たちで時間の空いてるときに活動をしています。外部からボランティアの要請を直接受け付けたり、学部や教職員宛に依頼などが来ると、そちらへ繋いでいます。そこにデータを蓄積し、

それから、学生さんでボランティア活動をしたい人も登録し、例えば気持ちがあっても、自分ではなかなか積極的に踏み出せない学生さんの背中を、同じ学生仲間がそっと押す。そういう役割を果たそう。これを「ボランティアコーディネート」というのですけども、その領域を学生さん自身で担っていたかどうかということで取り組みを行いました。今もこの形をずっとやっていたら、教員は背後に隠れて相談に乗っている（サポートする）形です。学生自身、このことを通じて地域の色んなニーズを知るとともに、もう一つは、トラブルも起こるわけです。それをどう解決して行くか、ということについても、学生さん自ら学んで行く、というきっかけにはなっております。

また、学生さんがグループで地域活動をしたいという場合に、学部として費用面からも促そうと、学生活動支援プログラムを設定し、申請された活動のテーマ・内容を学生・教員の前でプレゼンテーションをしてもらい、採択、不採択を決め、採択されたグループはそれを実際に展開し、一年後にはその成果をまたみんなの前で報告するという事業もしてまいりました。

それらには、ミニコミ誌（『おきつもー大学と地域の架け橋ー』）を学生さんが発行しております。また、学生さんが「コミュニティ・カフェ」を運営してくれている。これら以外にも、地域の文化というものを知り、そして、それらを自分たちも研究しながら、その成果を何か福祉施設で展開できないか、そういう発想に立ってくれる学生さんもいらっしたわけです（地域行事への参画支援、地域文化研究への支援〔例：民話採集↓児童施設等での紙芝居〕、行政の仕掛け〔地域福祉実施計画〕への呼応など）。

こうした中で私も教職員はどうしたらよいか、ということ、一つはできるだけ学生さんが「地域」（福祉施設・地域行事・町の見学・祭り）へ行くように、「連れ出す」という言葉は悪いんですけども、連れ出す役割を担おう。或いは、キャンパス自体が地域の自治会に入っておりましてので、「夏祭り」のときはみんなで、教職員と学生で手伝ったり、施設提供に応じることをしてきました。新しい自治会だったので宗教施設というものを設けておりませんが、大学構内にちょうど「名張学舎神明宮」というお社がありますので、そこを提供しまして、子ども神輿がやってくるという形も採られるようになりました。名張では太鼓台や神輿行列でご祝儀が渡されますので、こちらもポケットマネーで準備しました。いつの間にか、自治会の方がお神酒を神社に供えておいてくださるのですね。無理に神明宮へのお参りを申し上げるのではなく、こちらは、お祭だからお参りされることもあるだろうとして、提灯を吊るし並べておくだけです。地域に添うことで何らかの関係が生まれてきます。きっと潜在的に地域の方々が持つておられる意識が、そういう形で現れてくるのだらうと思いました。

八 附置研究所の活用

そうした中で、先ほども申しましたが、私どもは学部という教育組織の単位では出来ない事業を、事務的にもサポートしながら進めるということで、学部附置の「地域福祉文化研究所」で活動することとしました。ここには専任所員は誰もいません。全員が兼任ですけども、地域と関わる諸事業の展開を図りまし

た。資料に四つほど具体例を挙げてご紹介します（①子どもを対象とした事業の創出【*週末あそび塾（教員一名＋学生、於大学キャンパス）】、②公開講座・研究会などの開催、③自治体の受託研究、④三重大学との連携講座開催「伊賀文化フォーラム」）。その一例が、先ほど紹介しました健康スポーツの先生なんです。が、名張学舎で「一泊キャンプ」といって、市内の子どもたちを対象に大学へ泊るのだ、ということ、寝袋を持ってきて、グラウンドで寝るのです。一人の学生さんが子ども五人ほどを担当するのでしょうか、一緒にすごすですね。親御さんが、預けて行かれる。恒例行事として、地域の子どもや家庭に関わりをもたれました。これは子どもに関わることで、学生さんが育って行くもので、授業の一環と言うよりも、その先生の受講生やゼミ生を中心に呼びかけられ、それに応じて学生さんが参画するという状況です。

それから、こうした事業を私どもが展開するにしても、キャンパスが丘の上にあり、周辺にほとんど人家も無いところで、キャンパスへ地域の方々に来ていただくばかりなのです。そういうところですから、学生さんも授業が終わると、すぐに名張駅まで出て、そのまま帰って行くんですね。何とか町へとどまってもらいたいということで、駅前の空き家を借りまして、「まちなか研究室」というのを設けることにしました。

画面には、ちよつと変な格好をした姿が映っていますが、「怪人二十面相」の変装です。名張市は、推理作家の江戸川乱歩が生まれたところなんです。町の方々は「怪人二十面相」の格好してイベントに参加するんですが、こうした町が主催するイベントに、学部としても、研究所を通じて学生さんたちとともに

教職員ともども関わることをしています。推進役が特定の先生に偏るという課題はありますが、先生が個人の興味で関わっているのではなく、学部として地域と共に歩むという性格を持たせたところでした。

このような活動へ踏み出す契機や背景には、文科省が当時進めておりました「特色GP」とか、或いは「現代GP」という、競争的資金の獲得もありますが、これまで色々やってきたことを、外部資金を得てさらに展開させたいという考えに基づいています。GPの採択には漏れましたけれども、こういう取り組みを学部みんなで行うじゃないか、ということで、教授会の席でもその担当者に説明していただいて、全教員の参画をお願いしたり、或いは学生の皆さん方に、主旨を説明してまいたところでした。

九 大学外活動拠点の確保「まちなか研究室」

画面は「まちなか研究室」の事務室の写真です。資料には、「まちなか研究室事務室」（名張駅前、月々金の午後一時～五時開室、五、六名のアルバイト学生の常駐、市民への無料開放、学部主催講座開設「ちよつとちよつと講義」（毎年初回は伊勢神宮をテーマとする）、定期的勉強会の開催（市民主催「郷土史」勉強会、大学教職員・市役所職員運営「名張の地域文化を語る会」）と「まちなか研究室」（旧町（市街地）の集会所利用、随時・借用料支払、情報機器の整備（大学経費）、催事の開催↓郷土食彩時記 名張』の発刊）との二つの施設を分けて書いてあります。



よってだーこ 4号
コミュニティ・カフェ
「おきつも」

上本町・サンロード入り口



「まちなか研究室」本室
(榊町集議所)



事務室としましたのは、閉鎖中のお店を借りましたから、教室として使用するには耐震上の問題があつて、ここで講義を行つても授業として認められないという、法律上の課題があるからです。町中に部屋を借りるといっても、色んな制限を食らうんです。それは実際にやろうして分かつてくることでしたが、あきらめずに、何とかやろうという意識で進めてきまして、何事もそうした姿勢で関わってきたところが多かつたんじゃないかなと思つております。

写真は事務室ですが、先ほど申しました、学生さんたちが作っている情報誌『おきつも』ですね。それから、次の写真は地域の集会所を借りて、ここはリフォームされましたので、耐震はOKということで、講義や勉強会をしました。例えば地域の方々とともに「食」をテーマにした勉強会を開き、その成果をパンフレット（名張の食歳時記）として作ったりしました。私も地域の方々に教わりながら、名張流の粽づくり、チガヤで一生懸命に粽を巻きました。

それから写真は、シャッター商店街近くの民家で、学生さんたちがやっている「コミュニティ・カフェ」です。ここへは國學院大學の先生方にも訪れていただきました。今日の会にもお越しいただいておりますが。

私どもの地域、名張市は大和の国、奈良県に近く、よく似た伝統的な秋祭りがあり、祭りを通して地域や伝統を知ってもらふことも大事なことを考えております。私は神道関係の科目を担当していた時は、講義で紹介するとともに、祭りの日の一覧表を配り、引率して行きました。「行つてきなさい」というだけではだめですね。また、学生さんたちも、下宿している

地域の方やボランティア先から「今度手伝ってよ、この祭りにも」というお誘いを受けて手伝っていました。卒業後も祭りの手伝いに通ってくれた学生さんがいたことを、地域の方から教えていただきました。これは太鼓台の写真ですね。こうしたものを祭りに担ぎに行ったりしておったところです。

十 学生が地域に関わっている状況から地域文化を知る

これまで「地域文化」を対象として、膨大な研究がなされていますし、「地域文化とは何か」という問いかけはさらに深められて行くところもあるかと思っています。学術研究上の課題とは別に、学生教育との関係において、私が感じる場所の一つは、学生さんが実際に地域に関わっていらっしやって、その状況から、私どもはその地域の文化には何があるか、ということを知る、こういうボトムアップ的な、情報収集といえは収集ですが、地域に聞き耳を立てるということとは、大事なスタンスだと思ふのです。この立場は、これが地域文化だとか、伝統文化だという知識を一方的に教授することとは異なる、双方方向から行う伝統や地域文化への気づきと研究・実践関与への展開です（「研究対象としての地域・地域文化」ではなく、そこで生活する人々との関わり・実践活動のなかから研究へと昇華するまなざし）。

そこに、所属する大学が関わっていける領域、教員の新たな力の出し方や、私の場合ですと福祉系学部の特性（学生が直接的、間接的な関わりから、或いはコミュニティ・ワークなどによって「奉仕の心」を感じたり、地域の人々の「祭り」場〔獅

子舞・太鼓・子ども狂言などの招聘」とするような大学祭の性格など）というものがあり、それらを学生が大事なこととして「選択」する姿勢が生まれてくるのかな、と思っております。

こうした点を、まとめてみますと、一番目は、学生さんが色んな形で発見してこられる、その「地域」はもちろん大学や学部の所在する地元でもありましようし、或いは学生さんが、自身で関わっていらっしやる「地域」の中かもしれませんが、その発見に教職員として何が出来るかを考えてみることでと思います。

二番目ですが、学生さんの中には、積極的に地域と関わることが出来る人もあれば、なかなか関わっていけない方もいらっしやいますので、教員だけでなく職員の方々と一緒に、学生を地域と「つなぐ」役割（「媒介」的立場）として果たせることがあるということです。この点で取り組んできたことを色々と経験を交えてお話しました。

それから、三番目が、「地域文化」は多様でしようし、色々な内容がありましようが、「地域の文化」は、特定の地域だけでの特色として孤立せず、その中に組み込まれている「日本の伝統」というものを併せて見出すことが大切であろうと思います。

例えば、これは伊賀地域の高齢者が多くおられる施設の話ですが、「お盆」の時期に、施設としては何らの行事もされませんが、そこで生活される方々が、お盆の最終日に、職員の方々の目にふれない所で「送り火」行事を毎年されているということです。誰が言い出したわけではなく、また強制的でもなく、一緒に生活をしてきて、亡くなられた方を、あたかも家族のよ

うにして送られるのですね。高齢者が多くおられる施設の場合、「死」という事象はとても微妙な位置にあります。自宅で葬儀を行うように居室を自宅代わりとして使うことは普通はなされないと思います。しかし、利用者の方は、お盆の時期となると亡くなられた方の霊を慰められるのですね。それは施設側が言わずとも、「生活」の中から生み出されてきたもの。そこにおられる方々の発想として、そういう行為が組み込まれているというものです。こうした行事は、地域のこの時期の在り方であるとともに、日本全体の中でその時期が来ると供養するというような、大きな伝統との連動性というものがあろうかと思えます。

私は先ほど、冒頭で学生の皆さんに、神道を頭のなかで理解するだけではなく、「神社」を通して知っていただきたいと、少し訴えるようなことを申しましたが、「地域文化」は、色んな形として現れておりますが、一つ大事なことは、何かそこに「聖なる在り方」というもの。例えば神社や、或いはお寺、或いは小さな信仰対象でもいいし、地域の中で、皆でこれは大事だとされ、「尊さ」以上に何か「神聖さ」というものを持っている。そういうものに学生さんが気づいて下さったらな、と思っています（地域文化の中の「聖なるもの」の発見から社会における「聖なる価値」への気づき）。

こういうことは、同時にこの社会において何が、倫理的な正義であるとか、大事な約束事なのか、マナーとなっているのか、しかもそれを根底で支えている「尊きもの」への意識に気づいていく契機になるのではないかと思います。そういうものが「地域文化」の中から学べる、そして学生さんが「地域で育てられる」。

このことはまた、私どもが「地域」に関わることで、これは非常に横柄な言い方かもしれませんが「地域を育てる」ことにつながるように思います。

こうした取り組みを通して、神道や日本文化を理解して行く、ということがこれまで私が意識してきたことでございます。

この想いが、どこまで成果を得ているかは検証が必要でしょうし、こうした取り組みの話が本当にお役に立つかどうか分かりませんが、ご参考になれば幸いです。少し時間オーバーしましたけども終了させていただきましたと思います。ご清聴ありがとうございました。

講師プロフィール

櫻井 治男（さくらい・はるお）

昭和二十四年、京都府生まれ。皇學館大学文学部国文学科卒業。皇學館大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了（文学修士）。博士（宗教学・國學院大學）。皇學館大学文学部神道学科教授を経て、現在、同大社会福祉学部教授、同学部長。日本宗教学会常務理事、財団法人国際宗教研究所理事なども務め、平成十九年からは、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター客員教授に就任している。専攻は宗教学、宗教社会学、神社祭祀研究。『蘇るムラの神々』（単著、大明堂、平成四年）、『地域神社の宗教学』（単著、弘文堂、平成二十二年）、全国神社保育団体連合会設立五十周年事業委員会編集『鎮守の森を保育の庭に―命を育む知恵がここに―』上・下巻（共編著、学習研究社、平成十三年）、世古口藤平著『神三郡神社参詣記』（編著、皇學館大学神道研究所、平成十七年）、『宗教と福祉―IAHR2005東京大会パネル記録―』（共編著、皇學館大学出版部、平成十八年）など、多数の著書、論文がある。